

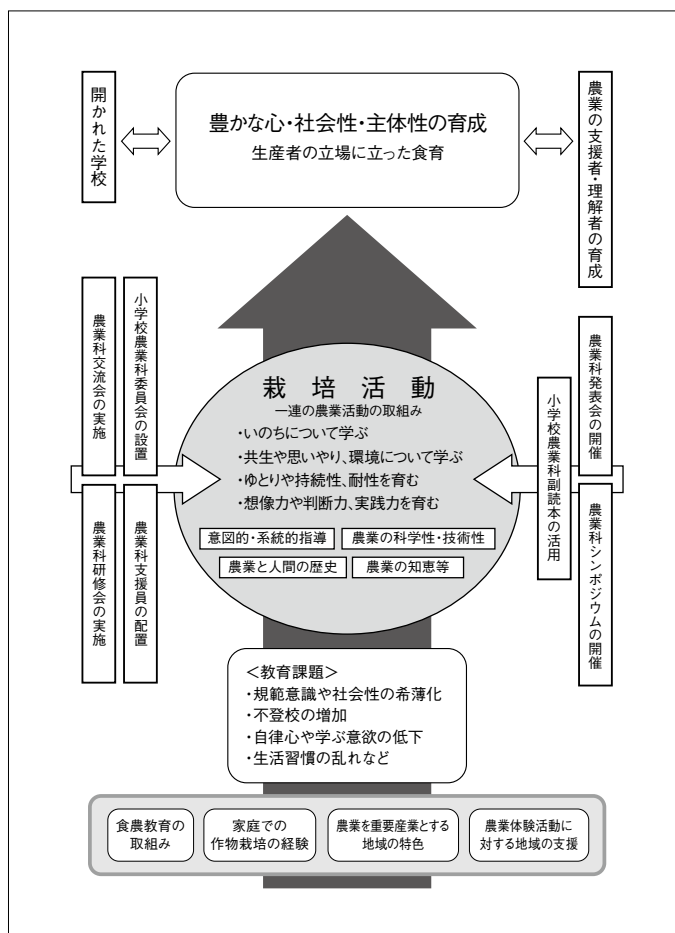
全国初！ 小学校農業科の試みもいよいよ5年目 ～子どもが変わり、地域が変わった～

農業が持つ“子どもたちの豊かな心を育む力”を教育に生かそうと始まった、喜多方市教育委員会の農業科。しかしそれは学校の中だけでできるものではない。地域の農家が支援員となり、農業高校に『農業科副読本』の作成を協力してもらい、そうやって地域みんなで農業科を盛りたてるなか、農業と農業に携わる祖父母たちを見る子どもたちの目が変わっていき、友だちや家族との関係、地域で生きていくことの意味を学んでいく。

喜多方市教育委員会

取組主体

- 名称：福島県喜多方市教育委員会
- 担当窓口 学校教育課
担当課(者)：渡部 裕
住所：福島県喜多方市西四ツ谷31
電話・FAX：0241-23-2113
E-mail：gakkyou@city.kitakata.fukushima.jp
- 団体等の属性：市町村
- 活動内容を紹介するHPアドレス：<http://www.city.kitakata.fukushima.jp/gyosei/4005/>
- 連携団体及び協力団体
属性：農林漁業に関する団体、市町村、学校
内訳：福島県立耶麻農業高校、福島県立会津農林高校、喜多方市小学校農業科委員会、農業科支援員、喜多方市農業委員会、福島県会津農林事務所、福島県喜多方農業普及所



取組地域及び地域の特徴

取組地域：福島県喜多方市
地域の特徴：

喜多方市は福島県会津地方の北部に位置し、北西に飯豊連峰を望み、東には雄国沼、そして磐梯山と豊かな自然に囲まれており、良質な水をもとに、蔵や文化財、ラーメンやそばなどを資源とした観光産業が進展し、年間170万人の観光客が訪れる観光都市である。

市の基幹産業は稲作を基幹作物とする農業であり、「コシヒカリ」「ひとめぼれ」など銘柄米が多く作付けされている。さらに、園芸作物についても、グリーンアスパラは県内有数の生産量を誇っている。

このように、喜多方市は、観光と農業を柱にした歴史と伝統のある地域である。

取組内容

(1)目的(目標)

「なすことによって学ぶ」精神に基づき、農作業の実体験活動を重視した教育を展開する。

ア 農業活動という直接的な体験を契機に、さまざまな面から児童の暮らしぶりを見つめ直させ、「豊かな心の育成」を図っていく。

イ 数ヶ月にわたる農作物栽培という具体的な体験を通し、児童に、責任感を持つことや努力することの必要性を徐々に気づかせ、目標に向かって取り組むことの大切さ、嫌なことや辛いことでもつづけることの意味を理解させ、現代の児童に欠如しがちな「社会性の育成」を図っていく。

ウ より良い作物を収穫するために、一定の目標を設定し計画を立てて取り組み、その時々に必要な対応策を考える過程には、今求められている「主体的な学習意欲や取り組む態度が必然的に育成」されるものと考えられる。

(2)取組開始時期・経緯

農業の持つ教育的価値を見直し、現在の学校課題(「豊かな心」「社会性」「主体性」の育成)を解決する一手段として、平成18年度に国の構造改革特別区域として喜多方市小学校農業教育特区の認定を受け、平成19年度に、全国初の教科としての「喜多方市小学校農業科」を設置した。平成20年度に文部科学省の教育課程特例校の指定を受け、農業科を実施し、学習指導要領の改訂に伴い平成21年度からは、「総合的な学習の時間」で実施している。

なお、平成22年度においては、小学校18校中15の小学校に農業科が設置され、3年生から6年生を対象に、年間35時間を充てて実施している。



そばの種まき

(3)対象作物：米、野菜、きのこ

作物名・種類：米、ジャガイモ、サツマイモ、ダイズ、スイカ、トマト、トウモロコシ(スイートコーン・ポップコーン)、カボチャ、ハクサイ、ダイコン、そば、マイタケ、しいたけ

選定理由：児童が比較的世話がしやすく、成長の過程を観察するのに適している。

(4)具体的な取組内容

農業科の実施方針

- ①体験的な学習を重視し、土に親しむということを中心に農業についての学習を進める。
- ②教科指導との関連を図りながら、気象、土壌、生物等についての基本的な知識を習得できるようにする。
- ③3・4年生では、主として農作業を中心に学習を進め、5・6年生において「健康」や「生命」いわゆる「食育」との関係について学習を進めるようにする。
- ④5・6年生では、記録をとりながら将来を予測し、計画的に農業に取り組む基礎的な力を養うことができるようにする。

⑤農業科の時間は、直接的な農作業体験の時間とし、「生命の尊重」「健康」「環境」「食物」などに関する事柄は、各教科や道徳、特別活動との関連のなかで指導する。

なお、農業科で使用するテキストとして、副読本『喜多方市小学校農業科』を作成し、平成20年度から活

用している。また、『喜多方市小学校農業科副読本解説書』を作成し、平成21年度から農業科の指導に活用している。

⑥地域との連携を重視し、地域のボランティアの支援を受けながら活動に取り組む。

(5)年間スケジュール

4月 支援員との打ち合わせ
5月～10月 栽培・収穫
11月～ 収穫祭・加工
2月 支援員との反省会

(6)実績及び推移

参加小学校・児童数(3年生～6年生)
平成19年度 3校 203名
平成20年度 9校 587名
平成21年度 14校 1007名
平成22年度 15校 1057名
平成23年度 18校 1970名(推定)
(市内小学校での完全実施予定)

(7)経費

全額市が負担(平成22年度は、2777千円)

課題及び対処方法(ポイント・工夫)等

●関係者(団体)との連携の経緯

(1)喜多方市小学校農業科委員会

市校長会、JA会津いいで、喜多方市農業委員会、喜多方農業普及所、会津農林事務所、農業科支援員、市農林課の代表者及び有識者からなる委員会を教育委員会が設置し、農業科の運営や指導計画等について協議し、広く農業関係者の意見を取り入れながら農業科を実施していくようにしている。

(2)農業科支援員

農業科の立ち上げの際、誰が農業科の指導をするのかということが問題となり、地域の農家の方に農業科支援員として指導を依頼することにした。具体的には、①無償ボランティアとすること、②教育委員会が委嘱すること、③市の負担で保険をかけることとした。

(3)農業高校との連携

農業科の構想を考える際の情報提供や農業科副読本作成委員会への教員の派遣、実施校教員の研修会の会場の提供や講師としての指導、実施校における児童と農業高校生の交流会等、さまざまな面で地元の耶麻農業高校と会津農林高校との連携を図りながら事業を実施している。

●連携を進めるに当たっての課題と対処方法(ポイント・工夫)

教員は教育の専門家であるが、農業に関しては素人である。支援員は農業の専門家ではあるが教育に関しては素人である。この課題を解決するために、『喜多方市小学校農業科副読本』やその解説書を作成し、取組みの内容やそのねらいを明らかにするとともに、実施校に共通した取組みが行なわれるようにした。

●コーディネーターの存在

教育委員会は農業科の全体に関わる内容や経費面等を担当し、具体的な取組みについては各実施校に委ね、実情や特色を生かした取組みができるようにしている。

実施校においては、校内小学校農業科委員会を設置し、農業科の取組みが計画的に行われるようにするとともに、その主任である担当教員が窓口となって、支援員との連絡調整等に当たっている。

●ほ場での運営の課題と対処方法

農地法上、教育委員会において農業科で使用するほ場の借り上げができないため、農園利用方式を採用してほ場を確保している。そのため、収穫物は原則地主の方のものとなるが、地主の方のご厚意により、畑での収穫物はすべて子どもたちが収穫し、イネについても収穫祭等で使用する米を無償でいただいている。

●安全管理

農具の使い方については、『農業科副読本』に掲載するとともに、具体的な活動の場面において、支援員や教員が指導している。

これまでの成果

子どもの変化

- ・自然のなかで作物を栽培する活動を通して、感性や心の豊かさなどが培われている。
- ・自分の世話の仕方を振り返り、しっかり世話をしようとする責任感や主体性が育ってきている。
- ・農業が一人ではできないことを経験し、「友だち」や「みんな」という、社会性の基礎が培われる。
- ・来年こそしっかりと作物を育てたいという挑戦する意欲が高まる。
- ・「おいしい」と言ってもらえる喜びを感じ、人のために役立ちたいという気持ちを持つようになる。

地域の変化

- ・農業科の学習に地域の方が関わり、地域の教育力が復活する。
- ・農業というお年寄りの得意分野が学校教育に生かされ、お年寄りの活躍する場が確保される。
- ・児童だけでなく支援員や保護者など、さまざまな立場での地域に対する誇りが形づくられる。

家庭の変化

- ・農業に関わる祖父母だけでなく、あまり畑の様子を知らない母親も畑に出向くようになってきた。
- ・児童が農業に取り組む祖父母を尊敬するようになってきている。



そば打ち体験

今後の構想、課題

- ・現在、農業科を実施していない3校は、400～500人規模の学校であり、圃場の広さ等の面で問題がある。次年度の完全実施に向けて、学年別内容や取組み方法の工夫をしていきたい。
- ・農業を通してさまざまなことを学ぶことを目的とし、「無理をしないで」「できる範囲で取り組む」を今後も取組みの基本としていく。
- ・農業科の学習を通して、「喜多方を愛し誇りに思う子どもを育てる」という、“喜多方市としての取組み”であることを今後も大切にしていこう。

【平成21年度 喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集は、以下のサイト】

<http://www.city.kitakata.fukushima.jp/gyosei/4005/011273.html>

喜多方市教育委員会

みんなのコメント集

取組の 実践者

喜多方市立入田付小学校 農業科支援員

農村地域であっても、普段は子どもたちが農業を体験する機会が少ないんです。農業科の農業体験を通じて、子どもたちの成長が感じられます。子どもたちが喜ぶ姿を見ることがとても嬉しいです。

同小学校 用務員

子どもたちは、収穫の喜びはもちろんのこと、大根の種まきから収穫まで、野菜がだんだん成長する過程を、興味をもって観察しているようです。大根の間引きなど、途中の管理作業は手間もかかって大変ですが、子どもたちのことを思えばやる気が起きます。

参加者

学校の先生

- ・自分たちがつくったものを食べるという経験を通して、食べ物を大事にする気持ちが育ってきています。
- ・生徒たちが“自分たちがつくった野菜はおいしい”と言っています。“おいしい”と感じる心が育っています。
- ・体験を通じて、農業の苦労や収穫の喜びを味わっています。
- ・“つくったものは食べる”という活動を意識して指導しています。
- ・活動時間を確保するのに苦労しますね。どうしてもできない部分は、支援員や用務員の手伝いでカバーしています。

子どもたち

- ・稲刈りでは手が痛くなって大変だったけど、作物をつくる農業の楽しさと苦労が体験できて良かったと思います。
- ・農業体験を通じて、みんなで力を合わせることの大切さを学びました。

地域の人たち

- ・子どもたちと一緒に稲刈りができて、楽しかった!
- ・子どもたちは、上手にできてるよね。
- ・子どもたちは、いきいきしているし、一生懸命やっています。



稲刈り